講演会
建築家ヴォーリズと武蔵豊岡教会
―　愛と恵みの建築　―

入間市景観50選の一つであり、建築家W．M．ヴォーリズの主要作品の一つでもある「武蔵豊岡教会」について、ヴォーリズ建築に詳しい二人の建築史家による講演と対談で、その建築の魅力を探ります。

日時：　2011年5月8日(日)　午後1時30分より3時30分
会場：　黒須公民館大会議室
講師：　山形政昭氏（大阪芸術大学教授）
　　内田青蔵氏（神奈川大学教授）

次第

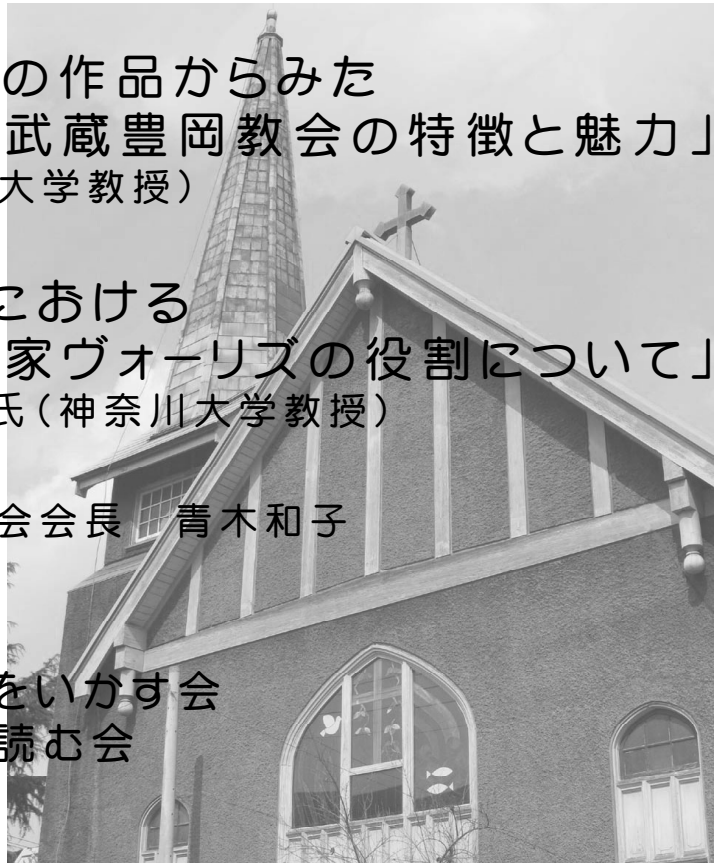
1　はじめに：
入間市の文化遺産をいかす会会長　岡野亘

2　基調講演：
「建築家ヴォーリズの作品からみた
武蔵豊岡教会の特徴と魅力」
山形政昭氏（大阪芸術大学教授）

3　対談：
「日本の近代建築における
建築家ヴォーリズの役割について」
山形政昭氏×内田青蔵氏（神奈川大学教授）

4　おわりに：
『石川家の人々』を読む会会長　青木和子

教会見学のご案内



主催：　入間市の文化遺産をいかす会
共催：　『石川家の人々』を読む会
後援：　入間市教育委員会

日本キリスト教団武蔵豊岡教会会堂

住所：埼玉県入間市河原町13-3
竣工：1923年(大正12)5月
設計：W．M．ヴォーリズ
構造：木造　吹き抜け一部2階建
面積：250.01㎡

素朴なコロニアルスタイルを基調とし、壁面をモルタルスタッコ塗に仕上げた外観はおおむね簡素ながら、妻壁の化粧梁と正面左手に配された八角錘の尖塔がひときわ印象的で、遠くからも目を惹く。

この簡素な外観に比べ、礼拝堂内は予想外の広さと特徴のある雰囲気に満たされている。特に船底形の天井は、ヴォーリズの教会建築でも他に見られないもので、一部に曲面を伴う仕上げと格天井の構成は、多分に和風を感じさせるところで一層興味深い。

この会堂は、当時日本でも有数の製糸工場であった石川組製糸所の創業者石川幾太郎が、「日本メソジスト豊岡教会」に用地1000坪と1万円を捧げ、1923年に24,105円5銭で竣工した。500人収容といわれ、当時は大勢の工女達も礼拝に出席していたという。

設計者ヴォーリズは、多数の教会建築を手がけているが木造は珍しい。東日本に残る数少ないヴォーリズ作品の一つであり、県内では唯一である。

建築に関係した職人は、地元黒須の堤常七、森濱吉他13人を含む１９人が記録に残っている。市内の吉沢建設創業者である吉沢重吉もこの事業に携わったと伝えられている。

1994年には入間市景観50選に選ばれ、近接する西洋館とともに入間市のランドマークとして、独特の景観を形成している。

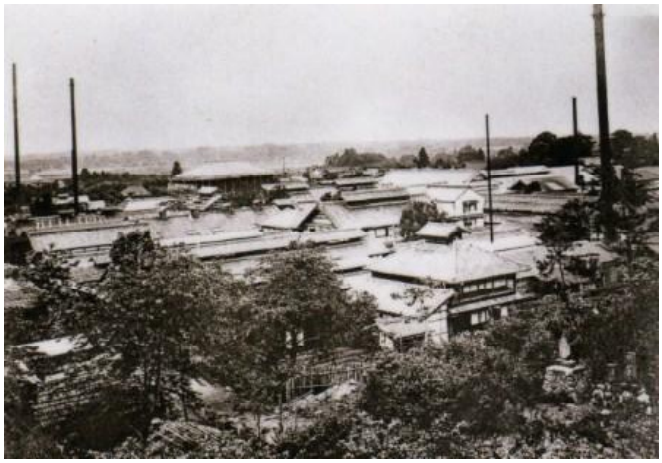
ウィリアム・メレル・ヴォーリズ　　1880―1964

アメリカ生まれ。1905年(明治38)滋賀県近江八幡商業学校の英語教師として来日。熱心なキリスト教伝道の故、2年後に解職されるが、近江八幡にとどまり、建築事務所や現在の近江兄弟社（メンソレータムの販売で知られる）を設立、伝道とともに教育・医療・出版などの活動を展開した。1941年（昭和16）日本に帰化、一柳米来留（ひとつやなぎめれる）と改名し、日本で生涯を終えた。近江八幡市名誉市民第1号。終戦後ＧＨＱ総司令官マッカーサーと近衛文麿との仲介工作に尽力し「天皇を守ったアメリカ人」とも称される。

ヴォーリズは、建築を「キリスト教精神の表現」と捉え、住む人、使う人を最優先しながら、学校、教会、住宅、商業ビル等1000棟を超える設計を手掛けた。合理性と簡素さを備えながらも日本の風土になじんだ親しみやすい建築は、恵みの場所として今でも多くの人に親しまれている。

代表作は「大丸心斎橋店」（1922)、「駒井家住宅」（1927）「関西学院大学」（1929)、「神戸女学院」（1934）など。

石川組製糸と西洋館



石川組製糸本店工場（現・県営黒須団地）

石川組製糸は、黒須村の農家に生まれた石川幾太郎（1855-1934）が、1893年（明治26）に創始した製糸会社。昭和初期には市内に3、狭山市に2、川越市に1、福島県・愛知県・三重県にそれぞれ1つずつの工場があった。信州資本に押される埼玉県の製糸業界にあって、1927年（昭和2）には出荷高で全国6位となる大企業に成長した。

幾太郎は武蔵野鉄道（現西武鉄道）の設立に参加し、1921年（大正10）には同社社長に就任している。また、豊岡小学校に雨天体操場を寄付、県立川越蚕糸学校（現川越総合高校）や川越盲学校、埼玉県へも多額の寄付をするなど、さまざまな社会事業にも貢献した。

また幾太郎の弟和助が洗礼を受け郷里に伝道したため、一族は皆熱心なクリスチャンであった。このため工場の経営はキリスト教精神に貫かれ、工女に対する過酷な扱いはなく、家庭夜学校や日曜学校を開設する等、慈愛に満ちた雇用が保たれていた。

大正初期、石川組はニューヨーク五番街に事務所を置いたが、取引先の貿易商が来日する折に、商談・宿泊するための迎賓館として造られたのが「西洋館」である。設計は東京帝国大学で西洋建築を学んだ室岡惣七、施工は川越の宮大工関根平蔵で1910年に上棟した。

外壁は化粧煉瓦貼り、屋根はヒップトゲーブルにアイブロウなど、ピクチャレスクな外観。室内は部屋ごとに趣向を凝らした天井や床、照明器具や家具が配される。玄関ホールの大理石製マントルピース、一木で造られた階段の手すり、大広間のステンドグラスなど贅の尽くされた姿は、戦後進駐軍の接収を経るもよく残されている。

このように栄華を極め、地域の発展を支えた石川組だが、関東大震災や昭和恐慌の影響により経営不振に陥り、1937年（昭和12）に倒産した。

西洋館は2001年に国の登録文化財となり、03年に石川本家から入間市に寄贈された。現在は年に数回の臨時公開が行なわれている。

〈主な引用参考文献〉　「ヴォーリズ建築探訪⑦武蔵豊岡教会」『湖畔の声』（1988.5），『石川家の人々』（2002），『ヴォーリズ建築の100年』（2008），『入間市博物館紀要第9号』（2011）

2011 年 5 月 8 日

W.M.ヴォーリズのミッション・ユートピア

山形政昭（大阪芸術大学）

１．はじめに

1905 年に来日し、滋賀県近江八幡を拠点としてキリスト教主義による様々な事業を行った米国人ウィリアム・メレル・ヴォーリズ William Merrell Vories（1880～1964）について、近年その建築が改めて注目されている。ヴォーリズの建築は、主として 20 世紀初頭の米国建築の流れを引いて、様式建築の構成と意匠を合理的に活用されたものであり、洋風でありながら日本の環境に馴染む工夫が図られたもので、良質で親近感ある建築が我国の各地に残されている。

ところでしばしば指摘されるように、ヴォーリズの建築活動は一般の建築事務所とは異なる性格があり、その内容を把握することによって、その独自性をより鮮明に解することができる。つまり、来日までの経歴と、日本での自立のために設立したヴォーリズ合名会社 W.M.Vories & Company という事業、近江ミッションというキリスト教団体とともに置かれた建築活動という特異性がある。

２．近江八幡へ、そして自立

ヴォーリズの出自については『自叙伝』（＊1）に詳しく述べられているように、1880 年に米国中西部の町レブンワースの中流家庭に生まれたヴォーリズは、幼少年期を通してキリスト教会活動に熱心な両親の感化、絵画や音楽という芸術に親しむ生活、そして 7 歳で一家が転居したフラグスタッフの町周辺の大自然という環境の下で育まれた性格について印象的に述べられている。つまりクリスチャンとしての自覚と芸術的感性と素養をもった利発な青年として成長していたことである。そして大学進学に際し、建築家への希望を抱きながら、諸事情によってコロラド大学で哲学を学んでいるが、ヴォーリズの記すところ、学生 YMCA 活動に熱心であったことである。それが生涯にわたる活動の指針の一つになったといえる。

海外伝道を志していたヴォーリズは青年会英語教師 Association　Teacher として紹介を受け、1905 年 2 月に滋賀県県立商業学校に赴任した。英語教師としての働きとともに、私的なバイブルクラスの成果は大きく、1907 年春に八幡 YMCA 会館を建て、教え子の一人吉田悦蔵ら同志となった学生と共にそこに居住した。そうしたキリスト教活動の反響によって在職 2 年で解雇されたが、ヴォーリズは八幡 YMCA 会館を拠点に活動をつづけ、1907 年 4 月に米国の支援者に向けて『The Omi-Mustard-Seed』誌を創刊し協力者を求めた。その翌年、ある支援者の紹介で京都 YMCA 会館の建築工事監督の仕事を得、建築設計監督事務所を一人で開設した。これが後のヴォーリズ建築事務所の創業とされている。1910 年にはシカゴでの宣教大会を目的に渡米し、青年建築技師チェーピンらの協力者を得て帰国し、ヴォーリズ合名会社を設立し建築設計と米国製雑貨販売事業を始めた。そして同時期にキリスト教活動の指導者に武田猪平牧師を迎え近江ミッション（近江基督教伝道団、後の近江兄弟社）が設立されている。

３．近江ミッションの活動

近江ミッションは名が示すようにキリスト教団体であるが、教会を中心に置いた活動とは異なる、特異な伝道団体であった。近江ミッションの目的と活動指針について、1916 年に明文化された「綱領」

があり、そこに示された特色を挙げると、第１に八幡 YMCA からの出発であり、超教派のキリスト教活動であったこと。第２に自立自営を図るため、産業部門（ヴォーリズ合名会社）を置いていたこと。さらに産業部の活動は単なる収益目的の事業ではなく、建築設計をキリスト教にもとづく精神の表現 Demonstrating Christianity と捉えていたことである。

近江ミッションの事業によって、具体的にもたらされたものの一つに、米国式の建築、とりわけ多様な洋風住宅と洋風生活様式がある。建築では先に記したように、八幡 YMCA 会館を最初にして、初期には京都帝国大学 YMCA 会館、東京 YMCA 会館などを残し、建築家として東北の福島教会、神戸で開校した時代の関西学院などの設計依頼を受けたことで、徐々に知られていったようだ。そのヴォーリズの米国式建築を近江八幡に強く印象づけたのが近江八幡池田町の一角に 1913 年に出現した近江ミッション住宅であるだろう。敷地約 1 千坪を有したこの住宅地に、米国人ウォーターハウス夫妻の住宅と、吉田悦蔵の住宅、そして両親を迎えようとするヴォーリズの住宅の 3 棟の西洋館が建てられた。米国式を範とした環境において、米国式の住習慣に倣った生活、それを健全な生活モデルとして表明したのである。この大正初期の近江ミッション住宅は、米国中流住宅の流れを引く西洋館としては我が国において最初の事例であると見られ、それは大正期に進行する住宅改良運動のモデルの一つとなっていくものであった。

４．事業の展開と特色

近江ミッションの産業部として位置づけられていたヴォーリズ合名会社は、事業の発展にともなって 1920 年に、建築部門がヴォーリズ建築事務所に、輸入販売部門が近江セールズ株式会社へと再編され、メンソレータムの販売事業が本格化する。とはいえ収益を出資者に還元する一般的な株式会社とは異なり、それは近江ミッションの活動を支え、その頃より近江サナトリウムの医療活動、清友園幼稚園をはじめとする教育活動も盛に進められていく。

ところでヴォーリズ建築事務所が組織づけられた 1920 年以降、ヴォーリズ自身は建築部を主に活動し、宣教部門からは離れていた。つまりヴォーリズは建築そのものを「キリスト教精神の表現」と捉えて最も力を注いでいたのである。そして建築の設計とは建築依頼者、種々の専門性を持った技師達の協力によってなされる総合的なものと述べている。こうした建築観と組織の内に、ヴォーリズの活動の特色が窺える。

明治 38 年の来幡により、教員時代を経て八幡 YMCA の活動、そして実験的と自らが語った近江ミッション（近江兄弟社）の事業は、「もっとも成功を納めた自主独立の基督教主義による事業」といわれ、大正期より昭和初期にかけての時代、一種の理想主義的共同社会事業がここに実現していたのである。その事業は、後継者によって現在に継承されているとともに、建築遺産の多くが近江八幡を中心に全国に残されている。

（＊1）一柳米来留『失敗者の自叙伝』近江兄弟社、1970。
クリスチャンとしての生涯については、奥村直彦『ヴォーリズ評伝－日本で隣人愛を実践したアメリカ人』港の人、2005。

（＊）本稿はデザイン史フォーラム編『アーツ・アンド・クラフツと日本』思文閣出版（2004）掲載の拙稿を一部改稿したものです。

M.Yamagata

ウィリアム・メレル・ヴォーリズの年譜・主要作品

1880 (M.13)	ウィリァム・メレル・ヴォーリズ、米国カンザス州レブンワースに生れる	
1904 (M.37)	コロラド大学(哲学科)を卒業、C. S. 市YMCAに勤務 ／1905 (M. 38) 来日し、滋賀県立商業学校教師となる(1907年3月解職)	
1907 (M.40)		近江八幡YMCA会館
1908 (M.41)	建築設計監督事務所を始める	
1909 (M.42)		福島教会(福島)
1910 (M.43)	ヴォーリズ合名会社設立 ／1911 (M. 43) 近江ミッション (1934年より近江兄弟社)を創設	
1912 (M.45)	軽井沢夏期事務所を開設	関西学院神学館(神戸)
1913 (T.02)		近江ミッション住宅、京都御幸町教会
1914 (T.03)		ピアソン邸(北見)
1916 (T05)		明治学院礼拝堂
1918 (T07)	近江サナトリウム(近江療養院)開院	近江サナトリウム(記念病院)、軽井沢ユニオン教会
1919 (T.08)	ヴォーリズ、一柳末徳子爵の三女満喜子と結婚	
1920 (T.09)	ヴォーリズ建築事務所を開設	同志社啓明館、廣岡邸(神戸)
1921 (T.10)	大阪事務所を開設	西南学院講堂(福岡)、松方邸(西町スクール)
1922 (T.11)	メンソレータムの販売事業が本格化する	大阪教会、大丸心斎橋店(1期)
1923 (T.12)	著書『吾家の設計』を刊行、翌年『吾家の設備』を刊行	豊岡教会、 諏訪邸(雲雀ヶ丘)
1925 (T.14)		大同生命ビルデイング、主婦の友社ビル、九州学院講堂(熊本)
1926 (T.15)		八尾政(東華采館)
1927 (S.02)		駒井邸(京都)
1929 (S.04)		関西学院(西宮)、小寺邸、神戸ユニオン教会
1930 (S.05)	母校のコロラド大学より名誉法学博士学位を受ける	軽井沢テニスコートクラブハウス、睡鳩荘(軽井沢)
1931 (S.06)		近江兄弟社清友園(ハイド記念館)、横浜共立学園
1932 (S.07)		同志社アーモスト館、下村邸(大丸ヴィラ)
1933 (S.08)	近江家政塾を創立	大丸心斎橋店(3期)
1934 (S.09)	近江ミッションを近江兄弟社と改称	神戸女学院(西宮)
1935 (S.10)		梨花女子大学校、西南女学院講堂(小倉)
1937 (S.12)	建築作品集『ヴォーリズ建築事務所作品集』刊行	佐藤新興生活館(山の上ホテル)、豊郷小学校
1940 (S.15)		マッケンジー邸(静岡)
1941 (S.16)	日本に帰化し一柳米来留となる、戦時中は軽井沢に逗留	
1944 (S.19)	戦時下にて建築業務を休止(1946年に再開)	
1957 (S.32)	療養生活に入る ／1958 (S. 33) 一柳米来留、近江八幡名誉市民第1号に推挙される	
1961 (S.36)	株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所設立	
1964 (S.39)	一柳米来留他界する(享年83歳)	

「建築家ヴォーリズと武蔵豊岡教会」講演会に寄せて　　2011 年 5 月 8 日

博愛主義の基で生まれた豊岡教会

・・・日本の工場村としての石川組製糸の成立・・・

内田　青蔵（神奈川大学）

１　旧石川組製糸と石川家の博愛主義

石川組製糸は、明治 26 年に創業し、日清戦争の好景気もあって事業は順調に発展し、大正元年には資本金 5 万の合資会社石川組となり、大正 9 年には株式会社石川組製糸へと組織を改めている。事業の拡大化・近代化の傍ら、創業者の石川幾太郎は、大正 10 年には県立蚕糸学校の建設資金として 1 万円の寄付、豊岡小学校に雨天体操場の建設、県立盲学校への資金援助というように、社会奉仕活動も行い、大正 12 年には豊岡教会堂の建設にも多くの援助を差し伸べている。こうした外部の社会に対する慈善事業はもちろんのこと、工場内の諸設備も単なる利潤追求のためだけではなく、従業人の生活をサポートする諸設備も積極的に備えるなど、いわば、博愛主義に満ちた労働環境が実践されていたのであった。

こうした博愛主義が展開されたのは、ひとえにキリスト教との結びつきに始まるといえる。石川家では、この石川組を興す石川幾太郎の弟の和助が明治 19 年にキリスト教に帰依し、その影響から石川家一家もキリスト教に帰依した。そして、事業の成功の傍ら、明治 45 年にはおごることなく人間らしく振舞うために、家憲と家訓を作成し、同族総会でこれを宣言した。家憲は、第 1 条は「基督教の主義精神を以て根本要義とする」、第 4 条「公共事業に尽力し慈善を行ふべし」、第 16 条「禁酒禁煙主義を励行すべし」といったキリスト教主義を基本としたもので、また、第 13 条では「雇員を準家族として取扱ひ之が為めに心身の修養練磨に必要なる設備をなすべし」と従業員を大切にすることが謳われている。そして、家訓は家憲をより具体化したもので、第 19 条では「人生の楽は家庭の和楽にあり」、第 23 条では「仕事の単調を避けよ　勤労と休養を適度にせよ」、第 24 条では「事業と経済の許す限り各家庭の為に衛生に適する家屋を設備すべし」のように家庭を大切にし、また、そのためにも住まいも重要であることが謳われている。また、第 33 条「徒弟の運動場と教育設備を漸次改善すべし」、第 34 条「雇員相当の年齢に至らば一家を立て得る様計ふ可し」、第 37 条「矯風の目的を以て有益なる娯楽を與ふる事をすべし」というように従業員に対してもその生活環境を整えることが謳われているのである。このように、事業者として、自らを律し、また、従業員を家族のように扱い、その生活を守っていくことに努力するという姿勢を見ることができるのである。

２　旧石川組製糸工場施設の様相

大正期の第一次世界大戦下でも石川組の事業は順調で、各工場でも増改築が行われた。こうした諸設備の充実のなかで、明治 41 年に工場内には従業員の再教育の場として夜間家庭学校が設けられた。専属の教員も雇われ、義務教育を終えていない子女の教育にあたったという。石川組の本店工場に配置図をみると、東北部に寄宿舎が並び、中央部には食堂・講堂・浴室、東側には診療所と病室が並んでいる。夜間家庭学校は、確認できないものの、「敷地の東南の隅にも、コンクリートで造られたタンク（水槽）があり、その近くに家庭学校（企業内の学校）があった」という。講堂は、売店が併設されており日常生活に必要なものは揃っていたという。また、時折映画やキリスト教関係の講演会などが行われ、クリスマスには礼拝とともに舞台で女工さんたちの歌や踊りが披露されたという。いずれにせよ、工場内に

こうした従業員用の慰安施設が設けられていたのは、極めて革新的であり、かつ、そうした施設が敷地中央に配されていることからも、従業員用施設を重要視していたことが窺えるのである。なお、こうした製糸場として、わが国最初のものとしては明治 5 年竣工の官営の富岡製糸工場が知られる。この富岡製糸工場は、純粋の製糸工場というよりは、フランスの援助により製糸技術を導入し、その技術を広く伝えるための指導者育成を兼ねた模範工場でもあった。その為、労働環境はもとより工女のための生活用施設としての寄宿舎や食堂、浴室、診療所が設けられ、また、明治 13 年からは工女の為の夜間学校が開設され、修身・読書・算術・作文習字・裁縫・茶の湯などを教えていたという（『旧富岡製糸場建造物群調査報告書』富岡市教育委員会　2006 年）。富岡は官営の為の工場であり、また時代も異なることから単純には比較できないものの、それでもこの富岡製糸場の諸施設と石川組の工場を比較すれば、石川組では従業員用の専用の夜間学校校舎が設けられ、また、様々な用途に対応した講堂という娯楽施設もあるなど、富岡製糸場以上の従業員用の施設があったといえる。その意味で、石川組製糸工場は、当時の工場施設にあっては、従業員の為の教育、娯楽の場を備えた極めて進んだわが国を代表する工場であったといえるであろう。

なお、こうした従業員の生活環境を考えた工場のあり方を強く主張した人物として、イギリスのロバート・オーエン（1771-1858）が知られる。すなわち、オーエンは企業家として従業員への高賃金・労働時間の短縮・良好な住宅の提供をめざし、郊外に工場と併設して従業員用住宅を構えた街を作った。この提案は、やがて、当時の博愛主義者の企業家により受け入れられ、例えば、1887 年の W.H. リーヴァーによる石鹸工場のポートサンライト、1895 年の G・カドヴェリーによるチョコレート工場のボーンビルといった工場と従業員用住宅を併設した工場村が出現している（『近代都市計画の起源』L. ベネヴォロ著　横山正訳　鹿島出版会　1976 年）。これらはやがて、ハワードの田園都市構想へと発展することになるが、従業員用の施設を重視した工場を建設していた石川組製糸工場もこうした工場村の流れに近い存在であったとえるかもしれない。

３　博愛主義のもとで生まれた豊岡教会堂

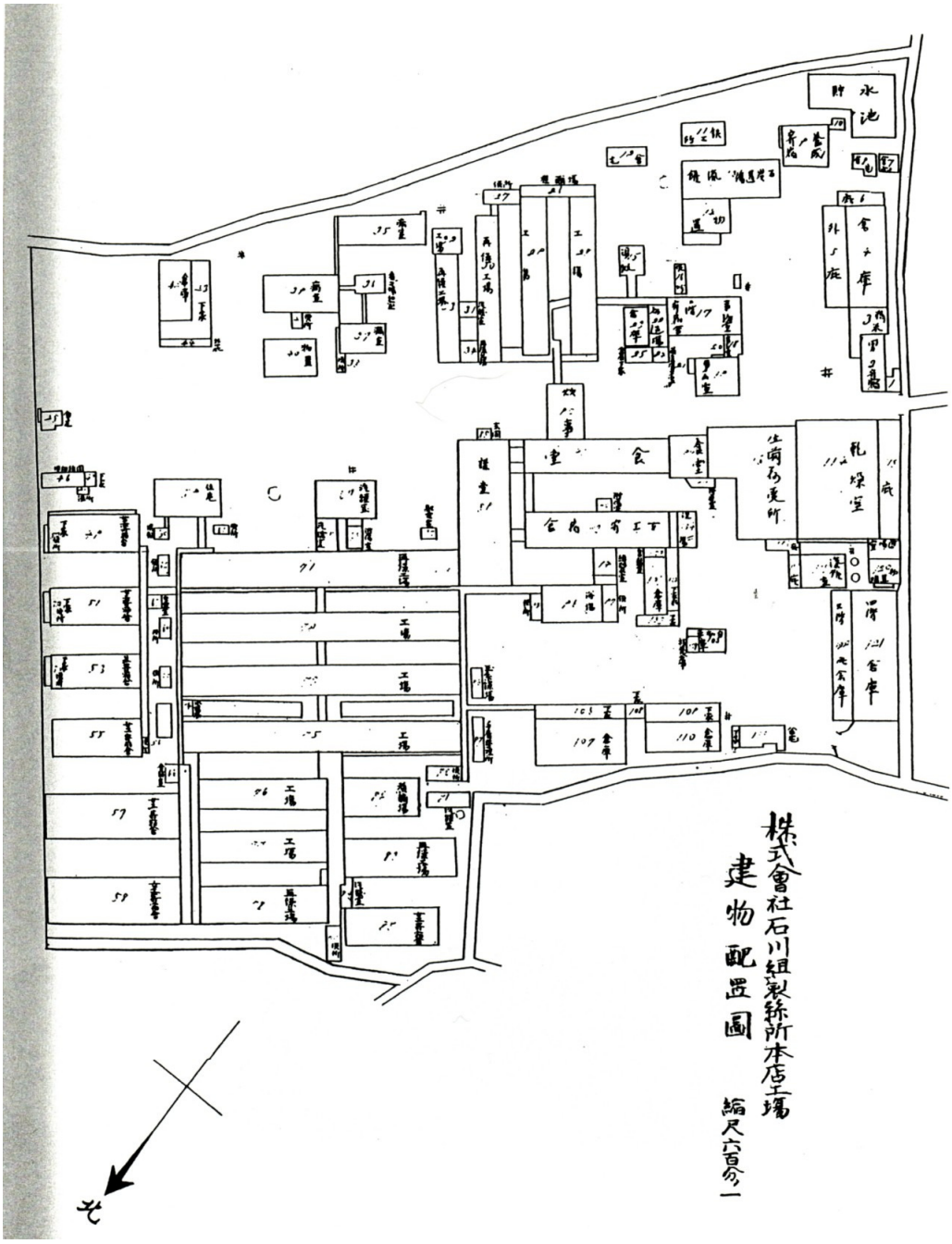
夜間家庭学校の開設とともに、工場内には従業員の精神教育や教養を身につけるために教育部が設けられ、石川和助も牧師として精神教育などに携わったという。こうした活動を通じて、豊岡教会に通う従業員も増えたが、ついには小さな教会堂では収容しきれず、一時期工場内には専任の牧師もおかれ、聖書研究や一般集会なども工場内でおこなわれたという。しかし、教会員と従業員の一緒の礼拝を守りたいという思いを受け、石川幾太郎は敷地と建設費の一部を寄付し、それを基に大正 12 年に現在の大勢の信者を収容できる新しい教会堂が完成した。それが豊岡教会堂であった。設計は、W. M. ヴォーリズで、シンプルながらも尖塔を持つそのデザインは、現在、地域の重要なランドマークともなっている。

さて、大正期には埼玉県内を中心に国内 4 県に 9 か所の工場とともにニューヨークに事務所を開設するほどの隆盛を極めた石川組製糸は､昭和期になると時代の流れに翻弄され昭和 12 年閉鎖された｡現在、工場跡地は住宅地となりその面影はないものの、その存在を僅かに伝える貴重なものとして石川組製糸西洋館がある。これは大正 12 年に石川幾太郎がアメリカのバイヤーを招くために迎賓館として建てたものである。設計者は、埼玉県入間郡の出身で、大正 2 年に東京帝大建築学科を卒業した室岡惣七で、同期には藤井厚二や堀越三郎がいた。卒業後は、司法省技師、東京電灯技師を経て、大正 8 年から独立して室岡工務所を開設していた。おそらく、石川幾太郎が、同郷の若き建築家を育てるために仕事を依頼

したもので、これも地域への思いの表れのひとつであったように思える。

いずれにせよ、この西洋館は、現在、入間市の文化財として保存されているが、この西洋館が戦前期の入間の近代化を支え、また、海外に入間という地の存在を知らしめた石川組製糸の象徴であるならば、この豊岡教会堂は石川家の人々の博愛主義思想とそれに基づく理想主義の象徴といえる。その意味で、この豊岡教会と西洋館はひとつの対として保存されるべきもので、共に地域の歴史にとってかけがえのない貴重な存在であり、また、ランドマークとしても現在でも価値あるものといえる。今後、生きた地域史を受け継ぐためにも、これらを守り、これらの建物と共にその意味を後世に伝えることが益々必要なことになるであろう。（石川家並びに石川組製糸関連に関しては、石川家本家『石川家の人々』2002 年を参照している）

「株式会社石川組製糸所本店工場　建物配置」（石川家本家『石川家の人々』2002 年）



豊岡教会近くの歴史的建造物

武蔵豊岡教会の近くには、西洋館の他にも入間市の近代化を伝える建物がいくつもあります。その一部をご紹介します。

黒須の㈱石川洋行事務所は、石川組本店工場の事務所を曳き家したものです。また付帯する「楽蔵（らくら）」は、かつて繭を保管していた3階建ての大きな土蔵です。akiko's field隣の「新道の家」は、本店工場の女工総監督だった女性が住んでいた洋風住宅です。黒須公民館からほど近い旧黒須銀行は、1909年（明治42）に竣工した土蔵造り銀行です（市指定文化財）。他にも繁田家長屋門や當麼茶店店舗などがあります。

入間市の文化遺産をいかす会について

本日は当会主催の講演会にお越しいただきありがとうございました。

当会は埼玉県入間市にのこる文化遺産に興味関心のある有志を中心に発足した団体です。

現在30人ほどの会員が在籍し、入間市の文化遺産の調査や、それに関する講演会などを開催しています。

また別な講演会や活動を行うことも考えておりますので、その際は足を運んで頂ければ幸いでございます。

また会のブログで最新情報を発信しておりますので、ぜひご覧下さい。

http://wind.ap.teacup.com/ikasukai/

Home made sweets
akiko's field
小さな焼菓子屋です。
ギフトに。いつものお茶の時間に。
tel:04・2964・6898
入間市黒須1-10-39

民間車検工場
株式会社石川洋行
〒358-0007
埼玉県入間市黒須1丁目10-31
TEL:04-2962-3420 FAX:04-2962-3424
自動車販売・整備・板金・各種保険
＊お車のことは何でもお申し付け下さい＊

AQUA RESORT
いるまの湯
入間市春日町1-11-10 電話 04-2966-4126
営業時間：朝10:00 ～ 夜12:00
大人 410円 中人 180円 小人 70円

―愛と祈り―
IWASAKI いわさき
■シティホールいわさき
〒358 入間市扇台3-1-9・市民会館そば
入間市・所沢市・狭山市

茶のはんだ 一味真
株式会社 ハンダ
〒358-0007 入間市黒須2-4-25
TEL 04-2963-3311 FAX 04-2962-9581
http://www.cha-handa.com/

学校法人 盈進学園 東野高等学校
Eishin Gakuen School Foundation Higashino High School
全日制普通科
入間市駅、小手指駅、狭山市駅、東飯能駅、箱根ヶ崎駅、小作駅よりスクールバスを運行
〒358-8558 埼玉県入間市二本木112-1
tel 04-2934-5292（代表）

電気自動車タクシー ついに登場!!
豊岡丸大タクシー有限会社
丸大タクシー配車専用番号
04-2962-4111
Big Circle 営業時間：朝5:00～午前2:00

減圧蒸留で造った
狭山茶のお酒 茶っ恋（ちゃっこい）
500ml アルコール度 25%
販売元 （株）山岸宇吉商店
TEL 04-2964-6111
お求めはお近くの酒販店まで

ＯＡ機器・オフィス家具・文具
各種名入・印刷・書籍・教科書
株式会社
ヤマトウ
Tel 04-2962-1275 Fax 04-2962-1276
〒358-0004 埼玉県入間市鍵山１－２
Mail info@yamatou.net
Web http://yamatou.net